

【香川県人権擁護委員連合会長賞】

みんなの笑顔のために

高松市立高松第一中学校 二年 川崎菜月

私には七歳年上の兄がいる。

兄は毎日家事をこなしている。掃除・洗濯・ゴミ捨て・アイロンがけは小学生の時からずっと続けていて、社会人になつた今でも必ず家事を終わらせてから出社している。

兄は電化製品の扱いにたけていて、特にパソコンは独学で覚え、ゲーム制作や執筆活動をして、余暇を楽しんでいる。また、記憶力もいい。説明書を愛読書にし、細かい設定まで熟知しているため、困った時は家族のみんなが兄に助けを求める。

兄は規則正しい生活をしている。毎朝五時半に起き、二十二時には寝る。ラジオ体操やウォーキングを毎日欠かさず行い、休日はおろか旅行先でもほぼ同じルートで過ごしている。起床時間が五分遅れただけで「寝過ごした!」と言うほど時間には正確だ。

兄は読書家だ。毎日本を読み、外出先にも必ず数冊持つて行く。本棚は番号通りに整理され、お気に入りの本は補正テープで何度も直すほど大切にしている。本の場所を入れ替えるいたずらをしても、すぐに元通りになつているほど几帳面だ。

そして兄は私に非常に甘い。どんなわがままも最後には「しようがないなあ」と言いながら必ず聞いてくれる。私が母から叱られていると、どんな内容であれ、いつも私の味方になり最後には私の代わりに怒ってくれる。「遠慮のかたまり」があると必ず一番に私に確認し、そして姉から「妹はここにもいるんだけど!」と叱られて慌てふためくのがいつものパターンだ。

我が家にとって兄の存在はとても大きい。家中がギスギスした雰

囲気になった時、何気ない兄の言動によつて一変し、みんなが笑顔に変わる。我が家にいつも笑顔が絶えないのは兄のおかげだと思つている。

そんな自慢の兄だが、周りの人とは少々違つた行動をする。

相手の年齢や関係性を問わず、誰かに対しても必ず敬語と標準語を使う。ぶつぶつ独り言を言いながら歩いてみたり、泣いている子どもがいると耳をふさいで逃げたりする。人の顔や名前は全く覚えられないし、同世代の人たちのような会話も難しい。このような興味・関心の偏りや強いこだわり、聴覚過敏やコミュニケーションの困難さは、障がいのある兄の特性なのだ。

我が家は常に兄を中心にはまわつていて、兄がやりたいこと、参加できる行事や習い事には、家族で参加した。そこで私は、様々な障がいのある人たちと出会つた。気がついた時には、私のことを「なっちゃん」と呼び、気さくに接してくれる個性あふれる友だちがたくさんできていた。「優しく接してくれる」「一緒に遊んで楽しい」仲よくなるにはそれだけで十分だつた。当たり前の日常であるみんなとの時間を見私は誰よりも楽しんでいる。

ただ、学校や地域の人たちを見てみるとどうだろう。日常生活の中で障がい者と接する機会がある人は少なく、接し方に戸惑つている人が多いようだ。特に、私の学校は小中一貫教育校ではほぼメンバーが変わらないため、多様な個性がある人たちとの出会いや活動の場は、自分から求めない限り増えることはない。私も、もし兄がいない環境で育つていたら、みんなとの関わりが分からず、今のように楽しむことは難しかつたかもしだれない。

人との関わりで一番難しいのはコミュニケーションだと思う。言葉での会話が成立する家族や仲のいい友だちでさえ、お互いの考え方や思いの全てを理解することは難しい。ましてや、兄のように言語理解に

困難さを抱えていたり、言葉がうまく使えなかつたりする人たちとのコミュニケーションは、相手の特性や伝え方のコツを知らないと難しいと感じることがある。私もみんなの全てを理解できるわけではないが、みんなと楽しい時間を過ごす自信はある。なぜなら、コミュニケーションを取る方法は、言語以外にもたくさんあることを経験し、知っているからだ。

「コミュニケーションは得意な方が歩み寄る」

これは兄の支援者が教えてくれた言葉だ。幼かつた私にこれまでたくさんの人人が歩み寄ってくれたように、今度は私が歩み寄ればいい。私だからこそできる、社会とみんなをつなぐ架け橋となり、歩み寄るサポートをしていきたいと思う。

これからもみんなとの楽しい時間を共有し、笑い合い、一緒に楽しむ私の姿をたくさんの人々見てもらうことで、真面目で優しくて面白いみんなを知つてもらう機会を増やしていきたい。そして、社会の一員として、障がいの有無に関わらず、みんなに優しく笑顔の絶えない社会を創っていきたいと思う。